大学生のメディア利用実態に基づくSNS運用方法の検討

林　香織*　・廣田有里**

要　約

昨年度明らかにした本学学生のメディア利用実態として，平日の在宅時間が長い学生ほど携帯インターネットやテレビ視聴に時間を費やしていることがわかった。本来大学に来ているはずの時間を，メディア利用に費やすライフスタイルの学生を“学内に居場所のない学生”と位置づけ，彼らへの居場所としての学内限定のSNSを運用する方法を検討するもの。まず，先行研究の整理から，「SNSは大学内における学習支援･学生生活不安除去に効果的に作用する」との理論仮説と，「SNSの高利用者ほど学生生活不安が低くなる」などの作業仮説を林が提示。仮説検証のために必要なシステム構築を廣田が検討し，次年度から運用を開始する。

キーワード：SNS，学習支援，システム構築

はじめに

本稿は，平成22年度学内共同研究「SNSを用いた地域貢献活動の実態把握研究―学生のメディア利用実態に基づくSNS運用方法の検討―」（研究代表者：林香織，研究分担者：廣田有里，木村文香）の一環として，SNS運用方法を情報行動とソフトウェア工学の観点から検討するものである。検討手順として，まず昨年度実施した本学学生を対象とする「大学生の生活調査[(1)]」結果と先行研究の整理からSNS運用方法を林が提示し，学内SNSを廣田が構築していくこととした。

本研究は，こうしたSNSを構築し，大学に居場所のない学生にとっての「憩いの場」をネット上で提供することを目的としており，SNSの運用を通じた学習支援の形態を模索するものである。

2010年11月29日受付
* 江戸川大学　マス・コミュニケーション学科講師
メディアコミュニケーション論
** 江戸川大学　情報文化学科准教授
ソフトウェア工学

1. 研究背景

ソーシャルネットワーキングサービス（以下，SNS）の運用が日本で開始されたのが2004年。招待制で会員間に“友達の友達はみな友達”というネットワーク構築を想起させた「mixi」を始め，携帯電話などのモバイル中心に「GREE」，「モバゲータウン」などのサービスに人気が集まっている。中でもmixiは2010年4月現在で2,000万人のユーザー[(2)]を誇る巨大なSNSである。そもそも「SNS」とは，社会的なネットワークをネット上で展開していこうとするもので，総務省（2005）では，「新たな友人関係を広げることを目的に，参加者が互いに友人を紹介し合い，友人の関係，個人の趣味・嗜好等を登録してゆくコミュニティ型のウェブサイト」であると定義している。近年広がりを見せる「Twitter」ではなく，本研究でSNSを取り上げたのは，“参加者が互いに友人を紹介し合う”ことを重要視したためである。参加の導入部分において「Twitter」は，“Tweet”と“Follower”の関係は必ずしも双方向ではないのに対し，特に招待制をとった「mixi」は，双

方向のやり取りにより参加が促されるという点が挙げられる。Twitterは間口が広くFollower側に関係性を持つかどうかの決定権が与えられているのに対し，mixiでは間口は狭いが，その中では招待した側と招待された側に同等の関係性維持の決定権が与えられている。この点が友人との関係性強化に大きく影響を与えると考えられる。元々，本研究が対象とする学生のイメージ像は，「大学の中に居場所のない学生」である。物理的，心理的に，居心地の悪さや身の置き場のなさを感じている学生に，“居場所”を作ることを目的としているため，関係性を結ぶための入り口として，決定権の所在は重要な要素となると考えられる。

2. 先行研究の整理

SNSを大学教育に導入するための研究は，教育工学や，情報学などの分野を中心に進められてきた。渡邉（2008）によると，帝京大学では学内SNSの運用を2008年に開始している。活用方法は大きく4つに大別でき，（1）研究室等の大学内コミュニティでの活用，（2）OB・OGとのコミュニケーションの場，（3）学生生活の情報交換・相互支援の場，（4）科目および科目以外学習の相互支援の場として利用されているという。管理者からの招待制を採用し，学内のウェブサイトや学内のポスターで管理者のアドレスを告知する形式をとったという。同研究では，活用という意味で活性化したのは，研究室での意見交換や，OB・OGからの就職相談，学生生活の情報交換といったコミュニティであったと報告されている。

この研究成果からは，情報が欲しいがそれを知る手段に乏しい学生像がみてとれる。先輩や知っている人にきいてみたいと思っても，どのようにして見つけたらいいのかわからないといった学生生活上の不安感をSNSの導入によって解決できる可能性を示唆するものである。また，北里大学でのSNSは外部のMultiply.comのサービスを2009年に導入しているが，学生と教員との連絡に非常に役に立っているのだという（Ellison&Collins2009）。特に非常勤講師と学生の間には，講師が抱える時間的制約があるため，その調整にSNSの導入効果が高いのだという。

実は既に本学には，「エドポタ」や「エドクラテス」といった学習支援ツールが存在している。特に「エドポタ」内には掲示板が用意され学生同士のコミュニケーションの場となってもおかしくないのだが……あまり活用されているとは言い難い。一つのポイントは「招待制」であると考えられる。mixiは招待制をとることで「友人登録とコミュニティへの参加が相互発展的に起こるので，友人関係と共通のコミュニティがあるかどうかはある程度相関」の関係にある（松尾，安田2006）という。友人関係がある人と共通のコミュニティがあるかどうかは正の相関がはっきりと読み取れるのだという。帝京大学におけるSNS運用の考察にある，研究室での意見交換，OB・OGとのコミュニケーションなどが活発になるのはしごく当然で，“大学”という“closed”な環境における招待制は，むしろ“共通の関心ごと”を生みやすく，活性化させるために役立ったと考えられる。

一方，SNSにおける人間関係形成の問題も指摘されるようになった。伊藤，山本（2009）によると，SNSの問題点として（1）プロフィール詐称，（2）個人情報の流出，（3）中傷行為，（4）SNS疲れを挙げている。（1）～（3）については，ネットのマナーやリテラシー向上という点において，学内のSNSに参加させることは，モラル，リテラシーに関する教育機会の提供であり，効果を検証するということが有効であると考えられる。むしろ深刻なのは，SNS疲れである。SNSの特徴は，招待される・されないによってそもそも淘汰されているため，参加初期において友人関係を形成するinteractionによる負荷は小さい。反面，そもそも“関係性がある人”とのコミュニケーションツールとして利用が促進されると，息苦しいと感じるようになる。前出の研究では，返信しないと友人から責められる，そして全てのコメントに返信することが「義務」となるメカニズムが報告されている。実際学生の中には，「私はこんなに一生懸命日記を更新しているのに，あな

たはしていない」と責められたり，「友達のmixiの日記に自分の悪口が書かれていると，別の友人からきいてショックだった」など，SNSをめぐるトラブルの相談を受けることもある。

この点について役立つのが，社会心理学を中心に進められてきたweblogとSNSの対比からみたSNSにおけるコミュニケーション研究である。SNSが導入される以前，weblogにおけるウェブ日記は，自己表現よりもコミュニケーションにあることが指摘されてきた（川浦ら1999）。SNSにはこのweblogと同様にウェブ日記の機能があり，これが上記で指摘したSNS上の人間関係を圧迫する要因となっている。SNSでのウェブ日記は，自己表現よりもコミュニケーションにあることはweblogと一致しているものの，何よりも実際の友人との交流に強く主体をおくというタイプが存在していることもまた指摘されている（梅田ら2007）。つまりSNS上での“日記”は，コミュニケーションツールとして機能していると考えられる。これは先の，友人登録とコミュニティの相関とロジックが一致している。実際の友人関係をベースにSNSが成り立っているので，そこから逃れたくても逃れられなくなるという凝集性が「SNS疲れ」として表面化してきているためである。しかし，SNSは個々人の持つ社会的関係性をウェブ上で展開するものであるため，高頻度の利用者ほど負の効用を感じやすい，携帯電話やインターネットなどのコミュニケーションツールとしてのメディアが持つ特性を反映したものと考えられる。

3. 研究仮説と検証方法

先行研究から，本研究でのシステム構築のために研究仮説を設定した。

理論仮説：SNSは大学内における学習支援・学生生活不安除去に効果的に作用する。

この理論仮説検証のための作業仮説は以下の通り。

作業仮説（1）学内限定の“招待制”を採用することで，学内のことを話題にしやすくなる。

（2）SNSの高利用者ほど，学生生活の不安が低くなる。

（3）SNSの利用者によって，学内に，新たな人間関係のネットワークを構築することができる。

検証方法として，まずゼミ，演習実習といった少人数の講義から運用を始め，参与観察を行う。次にグループインタビューを実施し，聞き取り調査の結果をテキストマイニングソフトなどで，効果の分類や友人関係のネットワークを図式化した上，定量調査を行って前回の「大学生の学生生活」との差異を確認するといった手順をとることとする。具体的に，（1）はmixiの利用状況との比較，（2）は「学生生活不安尺度」の差異，（3）は学内での人間関係が充実することで，平日の在宅時間が減少するといった数値的根拠を示して明らかにすることが出来ると考えられる。

4. システム構築

仮説検証のために運用するシステムは以下の通り。

機能1. プロフ　自己紹介機能。学科／学年／性別といった属性，趣味や興味のあることについて，公開・非公開が選べるようにする。⇒どれくらいの範囲で公開するかを確認するためのもの。

機能2. あしあと　ログの解析のために，どのユーザーがどのユーザーに興味を持ったのかを確認するためのもの。

機能3. コミュニティ　運用を呼び掛けた授業毎でコミュニティを立ち上げる。

機能4.“エド友”　mixiにおける“マイミク”の設定。“エド友”からの招待を受ける形でネットワークの構築を見るためのもの。

機能5. 日記　web日記　学内限定であることから外部へのリンクが難しいため，

静止画などのコンテンツに留まる。

サーバには，OSとしてCentOSを使用し，SNSサービス構築のためにOpenPNEをインストールした。OpenPNEとは，SNSを構築するためのオープンソースのSNSエンジンである。OpenPNEはPHP上で動作し，データベースとしてMySQLを使用するため，PHPおよびMySQLのインストールも行った。

OpenPNEの基本機能には，仮説検証のための5つの機能を実現できる「プロフィール」機能,「フレンド」機能,「コミュニティ」機能,「日記」機能,「あしあと」機能が含まれている。また，管理機能として,「メンバ管理」機能や「コミュニティ管理」機能があり，学内での適切な運用のサポートを行うことができる。

OpenPNEは，大学での導入実績もあり，沖縄大学の教職員・関係者のための学習・情報共有の場として利用されている（沖縄大学SNS http://sns.okinawa-u.ac.jp/）。また，地域コミュニティの場としても提供されており，福島県人に特化した地域密着型のSNSとして「福島県版地域SNS Fuxima（http://www.fuxima.com/）」，広島県呉市にある中通商店街の青年部中通青年会が運営する地域情報や活動情報の交換の場として「中通サポーターズ（http://kure.nakadori.com/sapo/）」などが挙げられる。

まとめと今後の展望

大学生を対象としてSNSの運用は先行研究からの明らかなように,複数の大学で行われている。本学のSNSとしての特徴をどのように出すのかが今後の課題といえる。また，運用に際し，どのように告知するのかという方法論はどの研究分野でも検討されていない。学内に掲示したポスターや，ウェブサイトからの導入が一般的な方法であるようだが，各種の方法を試すことで，学生に効果的に情報を周知させる方法論を検討していきたい。また，学内に存在している「エドポタ」「エドクラテス」などとの棲み分けも重要な課題であるため，システムの運用には学術情報部や学務課など事務方との連携が欠かせないため，協力を仰いでいきたい。

《注》

（1）「大学生の生活調査」2009年11月実施、講義内における自己記入式アンケート調査。回収数250、内、有効回答数235。なお、この調査は平成21年度江戸川大学学内共同研究「地域コミュニティの拠点としての大学の役割」（研究代表者：林、研究分担者：廣田、木村）の一環で行った。

（2）株式会社mixiプレスリリース 2010.4.14 http://mixi.co.jp/press/2010/0414/2681

参考文献

Ellison,Tina Midori & Collins,Kim Sonoko,2009, University Students Using a Social Networking Service: Feedback, Observations, and Outcom, 北里大学一般教育紀要14号:109-116

伊藤大河・山本利一,2009, コミュニケーション能力育成を目指したSNSの効果的な活用, 日本教育情報学会年会論文集25号:282-283

梅田恭子・内藤祐美子・野崎浩成・江島徹郎,2007, 大学生を対象としたSNSのWeb日記によるコミュニケーションの検討, 日本教育工学会論文誌:69-72

江下雅之,2007,SNSにおける日記コミュニケーションの研究－交流の契機としての日記－, 目白大学文学・言語学研究第3号:57-70

川浦康至・山下清美・川上善郎,1999, 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか, 社会心理学研究14（3）:133-143

木村忠正,2005, 大学生初期利用者に見るSNSと対人信頼感, 日本社会情報学会学会誌:23-31

嵯峨山和美・久米健司・金西計英・松浦健二・三好康夫・松本純子・矢野米雄, 学生支援キャンパスSNSと学生の動向, 日本教育工学会論文誌32号:53-56

総務省,2005, ブログ・SNSの現状分析及び将来予測 http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/050517_3.html（2010.11.28）

林香織,2010, 大学生のメディア利用行動分析による地域社会との接点－大学が地域に貢献するためのネットワーク構築に向けて－, 情報と社会20号:179-186

松尾豊・安田雪,2007,SNSにおける関係形成原理－mixiのデータ分析－, 人工知能学会論文誌22巻5号G:531-541

渡辺博芳,2008, 大学におけるSNSの利用例, 技術と社会・倫理108号（75）:39-43